

幼稚園における外国人幼児への初期支援と就学支援

— U幼稚園における実践研究2 —

Early Stage and School Attendance Support to Foreign Children: The Practice Study in U Kindergarten in Japan vol.2

相磯 友子¹ 王 燕珍²

幼稚園において通訳がクラスに入り外国人幼児に対する支援を行う実践研究の2年目の経過を報告した。通訳による外国人幼児の初期支援として、「ゆっくりと会話のやりとりをする」、「幼稚園と家庭をつなげる」、「文化的背景を伝える」、という3つの支援が見られた。また、外国人幼児を受け入れる担任にとって、援助方針を相談できる存在がいることが、外国人幼児を安心して受け入れる体制づくりにつながると考えられた。さらに事例から保護者の気持ちに添った就学支援を考察した。

キーワード：外国人幼児、初期支援、就学支援、実践研究

I 問題と目的

筆者は、昨年、幼稚園における通訳Aさんによる支援によって、中国人幼児にどのような変化が見られたかを報告した（相磯，2015）。U幼稚園では、本年度も通訳による外国人幼児の支援を継続している。本研究では、通訳による外国人幼児に対する継続的な支援は、具体的にどのような場面で行われたのかを検討する。

品川（2011）は、外国人児童が多く入所する保育所の保育士を対象として、保育士たちがどのような意識や態度で保育を実践しているかを明らかにしている。その結果、多文化保育をすすめるための要因の一つとして、通訳の存在を挙げ、保育士たちが難しい状況にあっても、多文化保育を前向きに捉え実践を支えるには、それを支える環境があることを指摘している。

品川は「通訳はコミュニケーションの仲介役だけではなく、文化的な面や生活面の伝達をする存在」であり、「問題の解決そのものにプラスになり、難しい問題に向き合ったとしても、ストレスを乗り越

える力となる」と指摘する。この指摘は、本研究において重要な示唆を与えるものである。

以上のことから、本稿では、U幼稚園において通訳と担任は外国人幼児とその保護者に対してどのような支援を行ったのか、特に初期支援と就学支援に焦点を当てて検討することを目的とする。

II 研究方法

通訳と担任による初期支援と就学支援の内容を検討するために、U幼稚園においてフィールドワークを行った。

期間：2015年4月～12月

対象幼児：担任から通訳に入ってもらいたいという要請のあった5名のうち4名を本研究の対象とした。対象幼児の概要は表1の通りである。

通訳の概要：通訳のAさんは、教育学部4年の北京出身の女性である。2014年4月からU幼稚園において、週1回、1回約3時間、U幼稚園の非常勤講師として勤務しているため、幼稚園の子ども達にも顔なじみとなっている。

1 植草学園短期大学

2 千葉大学教育学部4年

表1 対象幼児の概要

対象幼児	対象幼児の概要
Kちゃん	年少クラス。女児。中国出身。
I君	年少クラス。男児。フィリピン出身。
E君	年少クラス。男児。フィリピン出身。
Y君	年長クラス。男児。年少クラスからU幼稚園に在籍。中国出身。

通訳の参加の立場：Aさんは、積極的な参与者（箕浦，1999）として、クラスに参加した。担任の先生と主任の先生、副園長先生による要請によって、当日に入るクラスを決めた。1日に1～2クラスを回り、先生のお話し、遊びのルール、製作の説明などの通訳を行った。筆者からは、対象幼児に対する通訳を中心にするが、他のクラスの子どもとも関わってほしいとお願いをした。勤務後に、対象幼児の観察記録をまとめ、毎回幼稚園に提出してもらった。幼稚園は、通訳Aさんの記録をファイルにとじ、職員が回覧して情報を共有した。

筆者の参加の立場：筆者は、U幼稚園及び通訳Aさんの相談役として関わった。また、担任の先生の要請により外国人幼児の保護者面談に立ち会った。

データの収集：通訳の観察記録（2015年4月～12月）、外国人幼児の保護者との面談に立ち会った際の記録（2015年7月に1回、10月に1回）、筆者による担任の先生、主任、副園長からの聞き取りメモ（2015年6月～12月）をデータとして収集した。通訳の記録の使用に際しては、通訳AさんとU幼稚園に許可を得た。筆者の担任の先生へのアドバイスや、保護者面談の際の保護者へのアドバイスもメモを取り、筆者自身の言動についてもできるだけ記録した。

データの分析：収集したデータを対象幼児ごとに分類し、時系列に整理した。

倫理的配慮：本稿では、プライバシー保護のため、外国人幼児、U幼稚園の先生の名前はすべて仮名を使用する。

Ⅲ 結果

1. 初期の受け入れに対する支援

まず、4月に年少クラスに入園したKちゃんの

事例を通して、初期の受け入れ援助の実際を見ていく。初期の受け入れ援助として、通訳Aさんは、ゆっくりと会話のやりとりをすること、家庭と幼稚園を繋ぐ、文化的背景を伝える、という3つの援助を行っていた。

1-1 ゆっくりと会話のやりとりをする—自分の鞆を持ち続けたKちゃん—

Kちゃんは、両親ともに中国出身の年少クラスに4月に入園した女児である。4月のKちゃんの様子は次のようであった。

日本語は全然聞き取れなそうですが、中国語が聞き取れます。自分の思いや気持ちをちゃんと中国語で話せます。小さい女の子ですが、個性が強い傾向があると感じました。中国語で話したことが分かってても、するかしないか、自分の意思で決めている感じでした。（2015年4月21日：通訳Aさんの記録）

Kちゃんは、4月、クラスでも自分の通園鞆を持ちながら行動していた。そのことについて通訳のAさんは、次のように記録している。

Kちゃんがいつもお荷物鞆を持ちながら行動するのは、まだ幼稚園のことに慣れていないこと、少し怖がっているのもあるのだと保護者から聞きました。実際、私が見えるところでは確かにそういう気持ちを強く感じますが、彼女は自分の物をちゃんと隣に置きたい、守りたい気持ちもあることが分かってきました。皆が使っている物を自分の物にした、誰かと一緒にいる時、もし“自分の物”を他人に触れたら、怒って手を出すこともあったからです。（2015年4月28日：通訳Aさんの記録）

登園した後、活動に入ってもKちゃんが自分の鞆を離そうとしなかった理由として、通訳のAさんは、まだ幼稚園に慣れず不安な気持ちが強いからではないかという保護者の言葉を聞いていた。また、“自分の物”を守りたいという気持ちもあるのではないかと推測している。

Kちゃんは、5月に入っても鞆を持ち続けていたが、少しずつ変化も見られるようになった。

【クラスの子どもと遊ぶ／日本語での返事／活動に興味を持って参加するKちゃん】

クラスの子どもと時々遊べるようになってきました。誰かと一緒に絵本を探したり、読んだりしたことがありました。聞き取れたことを考え、先生に日本語で返事をするのがたまに見られました。先生が何かを説明してくれて「いいですか」と言ったら、Kちゃんは「いいです」と返事しました。(中略)皆と一緒に歌を歌ったり、何かを作ったりする時、興味を持って参加していました。(2015年5月12日：通訳Aさんの記録)

Aさんの記録から、5月に入るとKちゃんが、クラスの他の子どもたちと一緒に絵本を読んだり、先生に日本語で返事をしたり、歌や製作などに興味を持って参加していることが分かる。クラスの活動に興味を持ちながら参加していたKちゃんは、担任の佐藤先生にも甘える様子が見られるようになった。

【担任の先生に甘えるKちゃん】

Kちゃんは朝から担任の先生の隣に行ったり、先生に抱っこしてもらったりすることがあって、前の週よりも先生とのやり取りが増えました。そして、先生の指示に従って行動するようになりました。(2015年5月19日：通訳Aさんの記録)

Kちゃんは依然として鞆を肌身離さず持ち歩くものの、担任の佐藤先生に甘えたり、佐藤先生の指示に従って行動したりするようになっていた。5月後半になると、Kちゃんは幼稚園の生活に慣れ、先生の指示も少しずつ理解できるようになっていた。

【先生や周りの子どもの動きを見て動く／先生の指示の理解ができるようになるKちゃん】

先週より園に入る時に何をすべきかをだんだん覚えてきて、お荷物からは完全に手は離れないですが、くつや帽子などちゃんと置くべきところに置くようになりました。(中略) Kちゃんは歌や身体を動かすことがとても好きで、先生や周りの子どもの動きを見ながら、楽しくやってくれました。(中略)先生の言っていることや指示がどんどん聞き取れるようになってきました。「すわりましょう」「気を付

け、び」「いいですか?」「いいですよ」などに、ちゃんと返事ができているように感じました。(2015年5月26日：通訳Aさんの記録)

Kちゃんが先生や周りの子どもの動きを見ながら体を動かしたり、先生の日常的な指示が理解したりできるようになったことがわかる。特に、毎日繰り返される先生と子どものやり取り、例えば先生が「気を付け、び」と言うと、子どもたちが気を付けの姿勢を取ることや、先生の「いいですか?」という問いかけに子どもたちが「いいですよ」と答えるというやり取りは、他の子どもと同じようにできるようになっていた。これは、先生の指示の内容そのものをKちゃんが理解したというよりも、先生と子どものやりとりの「型」を学んだことによると思われる。

Kちゃんは、6月に入ると鞆を持たなくなっていた。

【荷物を持たなくなりクラスで自由に行動できるようになったKちゃん】

先週からKちゃんはもうお荷物を教室の中で持たないようになったと聞きました。実際の観察でもそう感じました。そして、もっとクラスで自由に行動できていると感じられます。外で遊ぶ時も、前より落ち着いています。他のクラスの子どもが近くにいっても、逃げずに平気で一緒に遊べるようになってきました。でも時々言葉が通じないので、他の子に声をかけられても返事しないで自分のやっていることに没頭したり、自分の持っている遊び道具を他人に譲らないこともあります。(2015年6月9日：通訳Aさんの記録)

Aさんの記録からは、Kちゃんがクラスの中で自由に行動できるようになっていること、他のクラスの子が近づいても逃げずに一緒に遊べるようになっていたことがわかる。しかし、日本語の理解はまだ進んでいないため、他の子からの声掛けにこたえられず、遊び道具の貸し借りも難しい様子が窺われる。

Kちゃんが、幼稚園の生活に慣れるようにするために、通訳のAさんが心を砕いたのは、Kちゃんに「ゆっくり、丁寧に話す」ことだった。

【Kちゃんとゆっくりと会話のやりとりをする通訳Aさん】

ある程度やさしく、丁寧にルールを説明すれば、喜んでやってくれることもあります。(2015年4月21日：通訳Aさんの記録)

くつの並び方や、うわばきを使って教室に入ることなど、ゆっくりとKちゃんと会話のやりとりをした上で納得してもらえられます。(2015年4月28日：通訳Aさんの記録)

わがままなところや最初に説得できないことなど、一緒になってゆっくりと話してあげたら、少し妥協してくれると感じました。(2015年5月19日：通訳Aさんの記録)

記録から、通訳Aさんが、Kちゃんに対して、ゆっくりと丁寧にルールを説明したり、ゆっくりと会話のやり取りをしたりすることを心がけていたことが分かる。日本語を教えたり、先生の指示を通訳したりすることも大事だが、何よりもKちゃんとゆっくりと会話のやりとりをすることが、Kちゃんが幼稚園で安心して過ごせることに繋がったと思われる。

1-2 家庭と幼稚園を繋げる

通訳Aさんは、Kちゃんの家庭と幼稚園を繋げる援助もしていた。Aさんは、Kちゃんがクラスの中で自分の鞆や荷物を持ち歩くことについて保護者にも話を聞いていた。

Kちゃんがいつもお荷物鞆を持ちながら行動するのは、まだ幼稚園のことに慣れていないこと、少し怖がっているのもあるのだと保護者から聞きました。(2015年4月28日：通訳Aさんの記録)

今朝、KちゃんとKちゃんのお母さんは少し喧嘩のようなこともあったけれども、その後、担任の先生やクラスの友達と一緒に何かをやるうちに、気分がよくなりました。(2015年5月19日：通訳Aさんの記録)

Aさんは、9：00～12：00までの勤務であるが、

登園時に外国人幼児の保護者を見つけると自分から声をかけ、話を聞いていた。Kちゃんがクラスで自分の鞆や荷物を持ち歩くことについて保護者に伝え、その理由を推測している。また、朝、KちゃんとKちゃんのお母さんが喧嘩したことを記録に残すことによって、担任はKちゃんの朝の不機嫌な理由を知ることができたと思われる。このように、Aさんによる家庭と幼稚園を繋ぐ援助は、保護者に中国語で家庭の様子を聞くことが出来ない担任にとって、また、幼稚園の様子を日本語で聞くことのできない保護者にとって、双方に安心感をもたらす援助であったと思われる。

1-3 文化的背景を伝える

Aさんは、幼稚園におけるKちゃんの行動をその文化的背景から説明することがあった。例えば、Kちゃんは、他に人がいるとトイレに決して入ろうとしなかった。このことをAさんは、次のように説明している。

トイレに誰かいると、恥ずかしくて入らないようにします。もし、たくさんの子どもがいたら、もっと抵抗します。絶対トイレに行かないようにします。(2015年6月16日：通訳Aさんの記録)

Aさんによると、Kちゃんは、トイレやプールが怖いという。裸を恥ずかしいと思う文化があるからではないか。Kちゃんはみんなと一緒にトイレにも抵抗感がある。ドアを必ず閉め、みんなと一緒にのときは急いです。(2015年7月8日：筆者の記録)

Aさんは、Kちゃんが他の子と一緒にトイレに入ろうとしない行動を、幼稚園に慣れていないためではなく、中国に「裸を恥ずかしいと思う文化があるからではないか」と推測している。このようなAさんの助言により、クラスの子どもたちが集団でトイレに行くときに、Kちゃんのトイレのタイミングを少しずらすという援助につながった。また、Kちゃんだけでなく、他の中国出身の子どもに対しても、プールの着替えの時に皆の前で裸にならないように配慮したほうが良いのではないかと検討するきっかけとなった。

通訳Aさんは、Kちゃんが次第に幼稚園の生活に慣れると、意識的にKちゃんと距離をとり、Kちゃんが担任の先生とより関係を築くことのできるように配慮していた。

1-4 フィリピン出身のI君とE君—安心して担任がクラスに受け入れるために—

次に、Kちゃんとは別のクラスに4月から入園した年少のI君とE君の事例を見ていく。

I君とE君は二人ともフィリピンの出身であり、両親ともにフィリピン人である。6月に副園長先生を通して、I君とE君の担任である高橋先生から相談したいとの要請があり、筆者は担任の高橋先生の話の聞くとともに、保護者面談にも立ち会うこととなった。

【I君とE君と英語で話す高橋先生／保護者とのコミュニケーションの難しさ】

I君は、フィリピンで幼稚園経験がある。母によるとフィリピンの幼稚園に慣れるのに半年かった。真面目な性格。両親ともにフィリピン出身。家では英語を話す。高橋先生と母親は英語で話す。高橋先生とI君も英語で話している。

E君は、集団生活が初めて。母親と2人暮らし。母親は少し日本語を勉強している。E君は英語のリスニングはできるが、会話はできない。日本語は少しずつ覚えており日本語で返事をすることもある。活発な性格。

高橋先生によるとI君とE君の保護者にニュアンスが伝わらない。例えば、ベルマークの回収や、いつまでに何を返してほしい、絵本を持ち帰る日など。卒園児のフィリピンのお母さんに来てもらって通訳してもらっている。(2015年6月11日：筆者の記録)

高橋先生は、英語が話せることから、4月から6月まで、幼稚園でI君、E君に対して英語で話しかけていた。通訳Aさんは、中国出身の中国語話者であるため、Aさんにはクラスに1度入ってもらったきりで、高橋先生が全く日本語のわからないI君とE君を含む年少クラスを、補助教諭の土屋先生と担当していた。高橋先生が特に困っていたのは、I君

とは英語でコミュニケーションがとれるが、E君とは英語でコミュニケーションがとれないこと、また、保護者への連絡の際にニュアンスが伝わらないことだった。

そこで筆者が高橋先生に話したことは2つである。1つ目は、I君とE君に日本語で話しかけてほしいということである。高橋先生は、I君とE君はフィリピン出身であることから、何とかコミュニケーションをとろうと英語で話しかけていた。I君とは英語で意思疎通がとれていたもので、心苦しいお願いであった。しかし、フィリピン出身であっても英語ができる子どもばかりでないこと、幼稚園では日本語で、家庭では保護者の話しやすい言語(母語)で話すことで、場面ごとの言語の切り替えがしやすく、I君とE君も日本語を覚えやすいと説明した。また、I君とE君が母語を保持することは、小学校、中学校に進学後の保護者とのコミュニケーション維持につながるため、重要なことだと話した。

2つ目は、新入園児、しかも日本語でのコミュニケーションが難しいフィリピン出身の保護者が6月の時点で細かな連絡の際のニュアンスを理解するのは難しいと思うということである。U幼稚園では、園児の送迎は保護者が行っている。特に、お迎えの時間には、短時間に多数の保護者に連絡をしなくてはならない。担任にとっては、その中で、日本語でのコミュニケーションが難しい保護者が2名いたら、英語で話しかけたり、大事な連絡の際には、卒園児の保護者に通訳を頼んだりしなくてはならず、高橋先生はこれまでどれほど苦労されたかと思われる。その中で、短い言葉の中のニュアンスを理解してほしいと思う高橋先生の気持ちはよくわかる。しかし、ベルマークの回収や、絵本の貸し出しなど、日本の幼稚園では、これまで当然のこととして行われてきたことも、フィリピン出身の保護者にしてみれば、よくわからないことであり、言葉が理解できないだけではなく、日本の幼稚園文化を知らない状態の中で、ニュアンスが伝わらないことは仕方ないことだと考えてほしいと伝えた。その上で、保護者と話す時には、実物を見せたり話したり、何をいつまでもってきてほしいのか、日本語でも英語でもよいので紙に書いたりして伝えると保護者にはわかりやすくなるし、幼稚園に慣れるに従って、少し

ずつ理解も進むのではないかとと思うと話した。

7月にI君とE君の保護者面談に筆者も出席した。高橋先生によると二人とも日本語がいっぱい出てくるようになったという。

E君は日本語がいっぱい出てくるようになった。家でもE君は日本語で話しかけているがママはわからないようだ。I君も日本語で話すようにしたら日本語で答えるようになった。(2015年7月10日：筆者の保護者面談時の記録)

保護者面談では、高橋先生から夏休み中に日本語を忘れてしまうのではないかと、という心配が聞かれた。筆者は、確かに夏休み中に日本語を忘れてしまうかもしれないが、母語で話すこともI君とE君にとっては大事なことであり、夏休みに日本語を忘れても、2学期に幼稚園に戻ってくれば日本語を思い出すと思う、と筆者の考えを伝えた。保護者面談では、フィリピン出身の卒園児の保護者に通訳に入ってもらいながら、幼稚園での様子や家庭での様子を保護者と担任と一緒に確認することができた。

高橋先生は、筆者が講師を務めた研修では、次のようなレポートを書いている。

全く日本語が分からないまま入ってきた子によかれと思って英語で2ヶ月近く対応していましたが、「日本語で」とアドバイスを頂き実践していったところ、日本語がたくさん彼らから出るようになりました。そういったボランティアや手助けをしてくださる方が小・中学校だけでなく、幼稚園、保育園の先生も母語の大切さに気付かず今困っていると思うので、来てくださるともっといいのにと思いました。(2015年8月18日：高橋先生の研修レポート)

高橋先生のように日本語の全くわからない外国人幼児を受け入れることになった担任の先生は、外国人幼児に対して「これでよいのだろうか」と手探りの状態で学級運営をしている。そこで、援助方針などを相談できる存在がいることは安心した受け入れにつながると考えられる。

2. 保護者の気持ちに寄り添った就学支援

Y君は、昨年に引き続き、通訳Aさんが気にかけている年長の男児である。Y君は中国で生まれ、両親ともに中国出身者である。日本語、中国語ともに昨年に比べて理解は進んでいるものの、他の外国人幼児に比べて日本語の習得はゆっくりであった。

2-1 明るくなったY君

年長クラスになったY君のクラスに最初に入ったAさんは、Y君が昨年に比べてさらに明るくなったと感じていた。

久しぶりにY君と話ができて、また彼の行動や表情から“明るい子ども”というイメージが強く感じました。私より先に声を出し、挨拶や面白い話などどんどん話かけてくれて良かったと思います。幼稚園の生活にだんだん慣れていて、自分の居場所が見つかったかなと思いました。(2015年4月28日：通訳Aさんの記録)

2-2 先生の話に集中できないY君

5月、6月と通訳Aさんは、年少クラスのKちゃんのクラスに入ることが多かった。7月にY君のクラスに入ると、Y君が先生の話に集中できない様子に気づいた。

担任の先生が話す時、Y君は聞く途中で遊んでしまい、他の所（後ろ）に向いて、聞かなくなる面が多かったです。あるいは先生の方に向いて聞いているように見えるけれど、実はちゃんと聞いていないことが多いです。先生の言った通りに行動しない、今やるべきことが分からないから周りを見てから行動することがよくあります。クラスの子どもたちを待たせてしまうことが頻繁でした。(2015年7月1日：通訳Aさんの記録)

その後も通訳Aさんの記録には、たびたび、Y君が先生の話に集中できなかったり、突然誰かを突き飛ばしてしまったり、独り言を繰り返す様子が記されていた。

2-3 Y君の進路を迷う保護者

7月の上旬に行われた保護者面談で、Y君の母親は卒園後中国に帰る可能性を担当に話している。この時の保護者面談に当初、筆者は立ち会う予定であったが、体調不良のために欠席した。また、通訳Aさんの都合が合わず、通訳なしでのY君の母親と担任による保護者面談であった。

(Y君の画用紙を食べる、粘土を洗う等の行動について) 友だちの注目がほしいみたい。寂しい。友だちと遊びたい。義父がなくなったので、義母が一人きりで心配なので、中国へ帰るかもしれない。中国は9月から入学。卒園までは日本にいる。日本語が上手になった。先生の言っていることは理解出来ているが、話すのは苦手。(2015年7月9日：Y君の担任の面談時の記録)

記録から、Y君が幼稚園で画用紙を食べたり、粘土を洗ったりする行動をしていたこと、担任が心配し、そのことをY君の保護者と話していることがわかる。Y君の母親は、そのような行動の理由を「友だちの注目がほしい」「友だちと遊びたい」からだと考えている。Y君は、一人っ子である。U幼稚園には中国出身の友達があり、母親同士で連絡を取り合うこともあるが、習い事をしている子が多く、降園後はあまり遊べないという。幼稚園でもお友達と遊ぶことができずにいたが、Y君も友達をほしいと感じ、気を引くために画用紙を食べたり粘土を洗ったりするのではないかと考えていた。担任の林先生は、この保護者面談の際に、就学相談等で困ったことがあったら言ってほしいとY君の母親に伝えている。

2-4 中華学校の受験

2学期になってからも相変わらず、担任の先生の話に集中できないY君の様子が見られた。10月の初旬に運動会が行われたが、Y君は中華学校受験のために運動会を欠席した。中華学校とは、日本に在住する華僑華人の子弟の教育を目的とした学校のことである。その後、林先生がAさんに通訳してもらい、Y君の母親に話を聞いている。

中華学校は落ちてしまった。このまま日本にいるならば、小学校が心配。言葉のやりとりが上手く出来ない。教師の話に集中できない。中国語でも何を言っているか分からないことが多い。相談できるところがあるならばぜひ行きたい。父親も心配している。教室の質問が理解できず、困った顔や怒った顔をして黙ってしまうことが多い。言葉(会話)は増えている。友だちとの関わりも楽しんでいる。家でも集中力がない。(2015年10月13日：担任の保護者面談時の記録)

中華学校に不合格になったY君の保護者は、Y君の日本語の習得状況から日本の小学校で学ぶことを大変不安がっていた。林先生は、Y君の言葉がすぐに出てこないの、コミュニケーションが取れないこと、おままごとに入りたいたいのに入れない様子から、知っているお友だちのいる学校に行った方がいいのではないかと考えていた。

Y君の母親も就学に悩みを抱えておりY君の発達状況などを公的機関に相談に行きたいとの申し出があったことから、2学期の保護者面談に筆者も参加し、就学について話し合うこととなった。

2-5 就学についての保護者面談

就学検診の時期が迫り、就学について方針を決めなくてはいけない時期が近づいた10月下旬にY君の母親、担任の林先生、Y君、通訳Aさん、副園長、筆者が出席し、保護者面談が行われた。母親は中国語で、通訳Aさんが母親の話を詳しく聞きながら日本語に随時通訳する形で面談は行われた。

Y君の母親：中国に帰る可能性が高い。Y君が今のままでは学校についていけない。そういうときにお母さんが手伝うことができない。お父さんは一人っ子だが、お父さんのお母さんが中国で一人で寂しがっているの、帰る可能性がある。お父さんのお母さんは孫にそばにいてほしいと考えている。70～80%は中国に帰ると思う。20～30%で迷っているのは、Y君は日本で暮らしたい。中国に帰りたくない。Y君の気持ちも尊重してあげたい。夫婦ともに中国に帰っていないので、中国が今どんな状態かわからない。1年に1回、1か

月お正月に帰る程度である。(2015年10月29日：筆者の面談時のメモ)

Y君の母親の話から、70～80%の可能性で中国に帰ることを考えているが、20～30%は、Y君が日本で暮らしたいと希望していることから引き続き日本で生活することも考えていることが分かる。Y君が日本の小学校に入学した時に、日本語の習得状況から学校についていけない事を心配するだけでなく、そうなった時にY君の母親自身が手伝えることができないことも不安に感じ、それが日本の小学校への就学をためらわせる原因となっていることが窺われた。

Y君の家で中国に帰るか話しているとY君が自己主張したことがあったという。

夫婦で中国に帰るか話していると、Y君が「私は日本語の子ども、私は中国の子どもではないです」と中国語と日本語混じりで言った。(2015年10月29日：筆者の面談時のメモ)

このようなY君の強い自己主張により日本で生活が続けた方がよいのではないかと迷っているようだった。一方で、Y君の母親はY君の成長も感じていた。

Y君の母親：2学期は成長していると感じる。小学校に行こうねと言うと、「ずーっと幼稚園にいたい」と言う。ますます幼稚園が好きになっている。まだ決めていないが、中国語のピンインを学習する時期になっているので、今帰らないと間に合わないのではないかなと思う。もし、中国に帰るとしたら12月だが、卒業証書がもらえるか。本当は3月まで通わせたいが。

筆者：お母さんがピンインを教えることはできないですか？

Y君の母親：教えることはできると思うが、今のゆっくりのY君を見ていると、先生が教えるのと違うと心配。中国では9月から「学前班」というのがあり、すでにアルファベットの3分の1まで進んでいる。卒園後の4月から学前班に通うことは可能だが、中国の小学校入学までの半年でピン

インの学習が間に合うのか不安。

副園長：Y君が日本の小学校に適応できれば日本で生活したいですか？

Y君の母親：Y君の祖母が年を取ったので、帰りたいという気持ちがある。呼び寄せられればそうしたいが、ビザの問題もある。おばあちゃんも言葉ができないし心配。最初は、ずっとY君と日本にいたと思って塾にも通った。おばあちゃんのこともあるし、Y君のこともあるし、総合的に帰った方が良いかなあと。Y君のことをきっかけに考えるようになり、今のところはそう考えている。12月に帰って、1月2月は休園し、3月の卒園式に参加できるか？（中略）

Y君の母親：悩みを全部話せた。安心した。中国の家族も幼稚園に感謝している。(2015年10月29日：筆者の面談時のメモ)

「学前班」とは、自治体国際化協会のHPによると、幼稚園以外の就学前教育を施す場として、幼稚園の不足を補うため、小学校に付属して設置された1年制の幼児学級のことだという。また、ピンインとは、中国語の音韻をアルファベットで表記したものである。Y君の母親は、すでに中国に帰国することを前提に、学前班について調べており、そこでの学習の進み具合まで把握していた。また、12月には中国に帰国し、幼稚園は休園するが、3月の卒園式には出席したいという希望を持っていた。

そこで、副園長から、休園の手続きをし、卒園式の前に戻ってくれば卒園式への参加は可能であることが伝えられた。また、Y君は就学検診を日本で受け、12月に帰国することなどが確認された。Y君の母親の話をゆっくりと聞いたこと、Aさんによる通訳をはさんでの面談であったため、1時間半以上の面談となった。しかし、Y君の母親が最後に述べたように「悩みを全部話せた」面談となった。

林先生によると、Y君は11月24日から休園し中国に帰国して、現在は中国で近所の幼稚園に通っているという。

Ⅳ 考察

本研究は、U幼稚園における通訳による外国人幼児への支援に関する実践研究を通して、初期の受け

入れ段階における支援と、小学校に向けての就学支援に焦点を当てて事例を見てきた。ここでは、初期の受け入れ段階の支援を保護者の気持ちに添った就学支援について考察する。

1. 初期の受け入れ段階の支援

外国人幼児の幼稚園入園時の初期の受け入れ段階の支援として、通訳Aさんにより、「ゆっくりと会話のやりとりをする」「家庭と幼稚園を繋ぐ」「文化的背景を伝える」という支援が行われていた。

「ゆっくりと会話のやりとりをする」という支援とは、くつの並べ方やうわばきを使って教室に入ることなど、幼稚園のルールをKちゃんがわかるように、また、Kちゃんの疑問や質問に答えながら説明することである。このような「ゆっくりと会話のやりとりをする」という支援は、Kちゃんが幼稚園のルールを理解するのを助けるだけでなく、自分の疑問に答えてくれる人がいる、質問できる人がいるという安心感につながったと思われる。

昨年の研究から、外国人幼児が幼稚園で「心の拠り所」を形成することの重要性と、日本語の習得との関わりを指摘した(相磯, 2015)。Kちゃんが肌身離さず持ち歩いていた鞆は、Kちゃんにとっての「心の拠り所」であり、通訳AさんがKちゃんとゆっくり会話のやりとりをし、また、担任の佐藤先生とKちゃんの間に関係ができ、両者が「心の拠り所」になったことにより、鞆を持ち歩かなくなったと考えられる。

「家庭と幼稚園を繋ぐ」支援としては、鞆を手放さないKちゃん的心情を保護者に尋ねたり、朝の送りの時に母親とKちゃんが喧嘩していたことを担任の佐藤先生に伝えたりすることにより、通訳Aさんは家庭と幼稚園を繋いでいた。このことは、幼稚園入園間もないKちゃんの気持ちを佐藤先生が理解することに繋がるだけでなく、Kちゃんの保護者にとっても幼稚園に気持ちを伝えることができ、安心感を与えたと思われる。

「文化的背景を伝える」支援では、Kちゃんのトイレでの行動を理解するのを助け、援助方法を改めて考え直す契機になっていた。このことから、「文化的背景を伝える」支援は、Kちゃんと幼稚園の生活を調整することにつながったと考えられる。

次いで、フィリピン出身のI君とE君を年少クラスで担任することになった高橋先生に対して、筆者が相談にのったことは、対象幼児に対して幼稚園では日本語で話し、家庭では母語で話してもらう、といった援助方針を決める参考になったと考えられる。また、高橋先生の研修でのコメントから、外国人幼児を安心して受け入れる体制づくりにつながったと思われる。このような、対象幼児や保護者への直接的な支援だけでなく、担任の先生に対する支援も、外国人幼児の初期の受け入れ段階では重要な支援と言えよう。

2. 保護者の気持ちに添った就学支援

年長の中国出身のY君の事例からは、Y君の就学に対する保護者の複雑な心情が浮かび上がる。年少クラスからU幼稚園に通いながら、日本語習得はゆっくりであり、日本語でも中国語でも自分の思いをなかなか言葉に表せず、画用紙を口にしたり、粘土を洗ったりすることで友だちの気を引こうとするY君。そのようなY君の姿を見て、日本の小学校に進んでよいのか迷うY君の母親。日本の小学校に入学してもY君の母親が学習を見てあげることができないことにも悩んでいた。7月から10月にかけて、幼稚園でY君が見せた不安定な行動の背景には、このようなY君の母親の就学に対する不安があった可能性もある。

中華学校を受験し不合格になると、中国に帰国しようとする保護者に対して、ゆっくりとY君の母親の気持ちを確認していった保護者面談は、保護者の気持ちに添った就学支援であったと思われる。例えば、U幼稚園を卒園したい、中国の就学前教育である「学前班」にも参加したいというY君の母親の希望に添って、U幼稚園は、休園しながら「学前班」に参加できるようにし、3月に再度日本に戻ること卒園式にも出席できるような手続きを取っている。

このことから、必ずしも日本の小学校に無事に就学させることだけが、外国人幼児の就学支援なのではなく、保護者の異文化での子育ての悩みに寄り添いながら、一緒に就学支援を考えることが保護者の気持ちに添った就学支援につながると考えられる。

謝辞

研究に協力してくださったU幼稚園の副園長、主任の先生をはじめ、先生方、面談に立ち会うことを許可してくださった保護者と子どもたちに感謝いたします。また、U幼稚園の通訳として各クラスを回り、力を発揮してくれた通訳Aさんに感謝いたします。

参考文献

- 1) 相磯友子, 2015, 中国人幼児に対する通訳による支援—U幼稚園における実践研究から—, 植草学園短期大学紀要, 16, 47-56.
- 2) 箕浦康子, 1999, フィールドワークの技能と実際—マイクロエスノグラフィー入門, ミネルヴァ書房
- 3) 品川ひろみ, 2011, 多文化保育における保育者の意識—日系ブラジル人児童の保育を中心として—, 現代社会学研究第24巻, 23-42.
- 4) 一般財団法人自治体国際化協会 <http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/articles/jimusyo/160PEKIN/INDEX.HTM> (2015年1月19日閲覧)